



## 日本、2年連続の金

### 1年生・渡辺翠選手（桜蔭高）の快挙

イタリア・モデナで9月5日から10日間の日程で開催された第5回国際地学オリンピックで1年生の渡辺翠選手が金メダルを獲得。日本勢の金メダルは2年連続となった。日本勢は、浅見慶志朗選手（埼玉県立川越高3年）と松澤健裕選手（栄光学園高2年）が銀、松岡亮選手（北海道旭川西高3年）が銅を獲得し、4大会連続のメダル全員獲得となった。



表彰式後に、会場前で記念撮影をする日本チーム。左から、瀧上メンター、浅見、松岡、松澤、渡辺の各選手、杉メンター。

ヨーロッパでの初めての開催となった本大会では、26の国と地域から104名の選手が参加。選手に加え、メンターなどの役員やオブザーバー参加した8ヶ国の役員を合わせると総勢200人となり、史上最大の規模となった。

メダル数で日本は、韓国、台湾、タイに次ぎフィリピンと同じ4位。10位以内にはこのほか、インドとインドネシアがランク入りし、アジア勢の強さが印象づけられる結果となった（3面参照）。

金メダルを獲得した渡辺選手は、国内予選に昨年度も参加して好成績を収めた

が、年齢制限のため出場できなかった。今年日本の代表としては歴代最年少での出場。見事、金メダルを手にした。



帰国後、神本美恵子文部科学大臣政務官に賞状を見せる渡辺選手。

## 続々決まる開催地

### 日本開催は2016年以降

日本はつくば市で開かれる予定だった2012年の第6回国際地学オリンピックを東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故を受けて返上し、アルゼンチンが代わりに開催することとなった。今回のモデナ大会では、13年以降の候補地も議論され、2013年はインド、2014年はアメリカ、2015年はロシアが開催地となることが決まった。

日本委員会の瀧上豊理事は、「これまでは開催地をどこにするかというのが難問だったようなところもあったが、ここに来て逆に誘致合戦のような様相になった。これは、地学オリンピックにとって良いことだが、日本は震災発生前まで、順調に準備を進めていただけに悔しい気もする。早期に日本で開催するために、各方面の意見を聞いて行きたい」と話している。

日本誘致に当たって問題なのは財政。日本が参戦してから4回目の今回、参加した国や地域は24となり、日本が参加を始めた第2回大会の4倍の規模となっている。理事の間では「2012年であれば、まだ参加国数が少なかっただろうが、2016年以降となると参加国数は想像がつかない。他の国では資源系の企業から多額の寄付を受けるケースがあるが、資源小国の日本ではそれも望み薄」という見方が大勢。続々参加をしてくる国々の動向を見ながら、誘致が可能かを見極める難しい判断を迫られそうだ。

【今号の紙面】選手達の感想（2面）。イタリア大会詳報・AO入試（3面）。委員会ニュース（4面）。

# 思い切り頑張った 10 日間

## 選手が語るヨーロッパの地学・仲間達との交流

### 毎日気持ちを切り替えられた

成田国際空港に着き、飛行機から降りた時、これで私の地学オリンピックへの挑戦が終わったのだとしみじみ思いました。震災の影響で二次選抜が延期となり、私達が代表に決まったのは6月中旬のことでした。あっという間の、でもとても充実した3か月間でした。その間、ずっと夢見てきた金メダルを取ることができて、本当に嬉しいです。試験は3日間と長く、途中で何度も「失敗した、もう金はないだろう」と思うことがありました。それでも諦めず、毎日気持ちを切り替えて全力で取り組んだからこそ金メダルが取れたのだと思います。また、様々な国の高校生と交流する経験や ITFI（国際協力野外調査）の活動を通して、もっと英語力をつけなくては、と痛感しました。相手の言っていることがなかなか聞き取れずもどかしい思いもしましたが、たくさんの友達ができて良かったです。

渡辺翠選手

(桜蔭高1年)



金メダル受賞をともに喜ぶ渡辺選手

### 掛け替えのない交流

IESO（国際地学オリンピック）に参加した二週間は間違いなく自分の人生で最高の経験でした。今回は銀メダルを幸いにもとることができました。それよりも僕にとってはこの IESO でつくったたくさんの海外の友達との交流が自分の中では掛け替えのない思い出であり、一生の宝物になりました。IESO から帰る際、イタリアの友達がサッカーのユニ

フォームをわざわざ朝6時に起きてプレゼントしてくれた時には思わず泣きそうになりました。でも、この経験を僕は次の目標に生かしていきたいと思っています。それは海外に留学することです。僕は今まで日本の大学に進むことしか頭にありませんでしたが、この経験によって僕は留学したいと切に願うようになりました。なぜなら、世界中から人が集まって交流することが有意義なことだと知ったからです。仲間と一緒に一生懸命作った ITFT でベストクリエイティビティ賞をとれたことは感無量であり、大きな自信になりました。ここでつくった友達とは一生交流していきたいと思っています。

松澤健裕選手

(栄光学園高等学校2年)



ベストクリエイティビティ賞を受賞した松澤選手

### 新鮮だったイタリアの地学

イタリア（大陸）の地質、地形は規模が大きい。日本では見る事のできない大規模な氷河地形や変成帯の露頭。それを見られただけでも十分に素晴らしい経験であったがそれ以上に、世界観と視野の拡大、世界中の仲間との交流ができた事が価値のある事であったと思う。

地学（地質学）と言えば山奥の露頭へと行って地質調査するイメージがあったが、今回のイタリア大会の実技試験では町中で使われている石材の鑑定やそれにまつわるレクチャーがあった。

各国の学生と協力して課題に取り組む ITFI では英語と国際協力の重要性につい

て改めて認識させられた。メダルの色はともかく、とても得難いものを得る事ができた。

将来は、何か人の役に立てる発見、発明をしたい。この小学生からの夢を叶えるために自分がどの道に進むか、広い視野と国際性をもって考えていきたい。

浅見慶志朗選手

(埼玉県立立川越高等学校3年)



各国の仲間とプレゼンテーションの準備をする浅見選手

### 地学以外の知識も吸収したい

私は石が大好きなので、その独自の文化の中でも特に気がついた事なのですが、日本では石灰岩とまとめられてしまうところをイタリアでは紅色石灰岩や青色石灰岩などと色別に細かく分けている、というところが興味深かったです。地質学的な環境の違いから石材への応用の違いが生まれ、分類の細かさが生じたのだと考えられますが、とても面白いと感じました。

私の将来の夢は地質学の研究者になる事です。地学以外にも数学や物理学、化学にも興味があるので、地学以外の様々な分野の知識を吸収して、それを生かして地球を探っていくような研究者になりたいです。

松岡亮選手

(北海道旭川西高等学校3年)



ITFI で発表をする松岡選手

# データで見るイタリア大会

26の国と地域が参加した今回の大会では、南米を除くすべての大陸から参加があった。ますます国際化していく中、各国の成績を見ていくとともに、今後の強化方針について聞いてみた。

## 増加する参加国

日本勢が参加を始めた第2回大会の参加国・地域はフィリピン、日本、韓国、台湾、アメリカ、シンガポールの6つ。依然アジア優位は変わらないが、本大会はこのときの4倍の規模となり、アジアの比率も6割弱にまで下がってきた。

本大会の参加国  
**【アジア】** カンボジア、インド、インドネシア、イスラエル、日本、韓国、キルギスタン、ネパール、フィリピン、クウェート、シンガポール、スリランカ、台湾、タイ **【ヨーロッパ】** ベラルーシ、フランス、ハンガリー、イタリア、ルーマニア、ロシア、スペイン、ウクライナ **【その他】** オーストラリア、ホンジュラス、マラウイ、アメリカ（地域ごと・アルファベット順）

各国の順位とメダル獲得数

順位	国・地域	金	銀	銅
1	韓国	3	1	0
	台湾			
3	タイ	1	3	0
4	日本	1	2	1
	フィリピン			
5	イタリア	1	1	2
6	ルーマニア	1	0	3
7	インド	0	3	1
	インドネシア			
9	ウクライナ	0	2	2
	フランス			

位10%に金メダルが、その2倍に銀メダル、3倍に銅メダルが与えられる。今年のメダル獲得トップは韓国と台湾、またベストテン中アジア勢が7チームと依然アジアの強さが際立つ。しかし、イタリアは開催地の意地で5位に食い込み、ルーマニアも金を獲得するなどヨーロ

パ勢も健闘を見せている。

## 英語研修の充実を図る

日本が好成績を維持していくためには、国際色が豊かになっていく傾向に合わせて変化する出題傾向を把握しつつ、研修に生かすことが重要だろう。

一方、田中義洋オブザーバー（東京学芸大附属高）は、「メダルの色も大事だが、他の国の生徒と交流を深めることも重要。これまでもちゃんと交流しているが、もっと意思疎通が出来ればと言う選手が多いのは事実で、今後は英会話能力向上の為の研修も強化したい」と話している。



Salse di Niranoの泥火山を見学する選手達

## 強いアジア勢・ヨーロッパも健闘

地学オリンピックでは規程により、上

# 東日本大震災について意見交換

Skypeで被災地とイタリアがつながる

イタリア大会では9月12日に被災地の宮城県とイタリアの会場をインターネット動画通信システムであるSkype（スカイプ）を通じて結び、被災地の生

徒達とオリンピックの選手達が話し合う交流会が実施された。

被災地側の参加者は宮城県立宮城第一高等学校地学部の部員達。各国の選手達



交流会の様子（右上の画面が宮城第一高校）

は、宮城の高校生が語る地震や津波の体験を熱心に聞き入っていた。このイベントは、地震や津波の威力を世界中の若い人たちに実感してもらいたいという地元や日本委員会、-host国の協力で実現。交流を重視する地学オリンピックの理念が実を結んだ形となった。

## AO入試の対象大学増

大学が求める学生像と、受験生の個性や実績などを照らし合わせて合否を判定する、アドミッションズ・オフィス（AO）入試に、地学オリンピックの成績を利用できる大学として、このほど、大阪大学と東京工業大学が加わった。

地学オリンピックではすでに、広島大学、筑波大学、東北大学がAO入試の対象となっている。

日本委員会の久田健一郎理事は、「地学オリンピック国内予選の内容は高度で、入賞者も大学で好成績をあげるなど実績が積み重なっている。今後もAO入試で地学オリンピックの成績を利用する大学が増えていくのではないかと話す。

なお、地学、オリンピックの成績の活用法は大学により異なるので詳しくは、地学オリンピック日本委員会事務局や個々の大学に問い合わせたい。

# 地学が正式の 科学オリンピックに

日本の科学オリンピック活動を推進する、日本科学オリンピック推進委員会（会長・江崎玲於奈横浜薬科大学学長）は10月4日、理事会を開催し、地学オリンピックを同委員会に含めることを決めた。同委員会には地学オリンピック日本委員会の濱野洋三理事長が新たに委員として加わった。これにより、地学オリンピックは、数学、物理、化学、情報、生物学、地理とともに科学オリンピックの一つとして認知された格好。地学の普及に弾みがつくことを関係者は期待している。

## 国内予選 12月18日から

来年10月中旬に開催予定のアルゼンチン大会に派遣する代表選手選考の第一歩となる、国内第一次予選は北海道から沖縄までの全国64の会場で12月18日に開催されることが決まり、9月1日から募集を開始した。日本委員会事務局によると11月15日の締切時に、昨年の予選参加者869名を超える約900名の応募があった。



イタリア大会の開会式場（イタリア大会本部提供）

.....  
**Chiorin!** リレーエッセイ no.7

## 〈あきらめる〉ということ 桑原 央治



1828年、三条地震が新潟の地を襲った。子供を震災で失い“災難逃れ”の手段を尋ねた知人に宛てて良寛和尚は、「しかし、災難に逢う時節には逢うのがいい、死ぬ時節には死ぬのがいい、これが災害逃れの絶妙の方法だ」と返事している。若い皆さんは、この言葉をどう受け止めるだろうか。自然災害に対する日本人の態度は、〈あきらめ〉だと言われる。だが良寛の言葉は、そんなに単純で受動的なものだろうか。よく読めばそれは〈諦め= give up〉などではなく、人間が積み重ねてきた生と死を巡る深い〈明らめ=洞察〉であることに気づく。

地学とはまったく畑違いの国文学専攻の私が、自然の中での死に否応なく直面させられたのは、1986年伊豆大島噴火

での避難のため、島の栈橋で救援船を待つ間だった。地軸を揺るがす轟音の中、「生命は助からないとしても、自分の身に何が起きているのか、納得して死にたい」と痛切に思った。そんな時に来島された東京大学地震研究所の先生方からお話を伺う機会を得、激しい自然現象と自分の危機がようやく結びあわせられ、不思議に心が落ち着いた。そして誰もが避け得ない死を納得して迎えるためには、〈明らめる〉ことが不可欠であることを知った。

後日、プレートテクトニクス理論の確立に大きな役割を果たされた Dan McKenzie 博士を、大島へご案内する機会があった。そぼ降る雨の中、他の研究者達は早々に自動車に戻ったが、博士は

地層断面の前にいつまでも黙って立ち尽くしておられた。そのものに憑かれたような後ろ姿に、久しぶりで“学者”の姿を見たと思った。私の中で地球という自然と生身の人間が、激しく火花を飛ばした瞬間だった。

くわばらえいじ。東京大学地震研究所広報アウトリーチ室勤務。國學院大學文学部卒業後、国語教師として都立高校で教鞭を執る。都立大島高校に赴任中の1986年に三原山の噴火を体験。以後、防災教育の活動や提言を行う。2009年より現職。

NPO 法人地学オリンピック日本委員会  
ニュースレター Chiorin! (no.7)  
平成 23 年 11 月 28 日発行  
発行人：NPO 法人地学オリンピック日本委員会広報部会  
編集長：萬年一剛（広報副主査・神奈川県温泉地学研）  
〒113-0032  
東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル 4F  
日本地球惑星科学連合事務局気付（事務局長・瀧上）  
印刷所：樺あしがら印刷